

大腸内視鏡検査について

大腸の長さは 1.5～2m、太さ 6cm～9cm の臓器です。

大腸内視鏡検査は、肛門から内視鏡を挿入し大腸の内側を観察する検査です。はじめに、内視鏡を回盲部（小腸から大腸への移行部）まで到達させた後に、抜去しながら観察を行います。

大腸癌や前癌病変の発見・治療だけでなく、潰瘍性大腸炎などに代表される炎症性疾患や感染症の診断にも用いられます。

大腸内視鏡検査でわかる主な病気

1) 大腸がん

大腸（結腸・直腸・肛門）に発生した悪性腫瘍。S 状結腸と直腸にがんがでやすいといわれています。大腸がんは、腺腫という良性のポリープががん化して発生するものと正常な粘膜から直接発生するものがあると考えられています。「早期がん」

と「進行がん」に分かれ、転移の有無によって「病期（ステージ）」と「治療方針」が決まります。

2) 大腸ポリープ

大腸ポリープは、粘膜の一部が盛り上がり突起状になったものです。良性のものもありますが、がん化することがあり、大腸内視鏡検査による病変の診断が重要となります。症状はありませんが、大きくなってくると便潜血（べんせんけつ）や出血の症状が見られます。

2) 潰瘍性大腸炎

大腸粘膜の炎症により、潰瘍やびらんなどが生じる病気です。下痢、腹痛、発熱、血便、貧血などの症状があります。原因は不明ですが免疫システムの異常と考えられています。20代から30代の若年層に多くみられ、厚生労働省は、難病に指定しています。

4) 過敏性腸症候群

下痢・便秘、膨満感や腹痛など、下腹部の不快感が継続的に生じているにも関わらず、炎症や潰瘍・腫瘍が認められない状態を過敏性腸症候群と言います。20～40歳代に多く見られるもので、ストレス、知覚過敏、消化管の運動異常などに起因します。